

朝日新聞 時事ワークシート
図表の読み解き

襲う、大規模火災

※原文から一部書き直している場合があります。

解答・解説

大分市佐賀関で起きた火災^{さがせき}は、180棟以上を巻き込む惨事になつた。火災を防ぐには、まずは火を出さないこと、そして消火器などによる初期消火が重要になる。

火災の原因で一番多いのが、

①の不始末。次いで、たき火やコンロが続く。雷といった天災によるものは1%に満たず、失火が②%を占めている。

広がってしまったら、拡大を防ぎ、巻き込まれないようにすることが大切になる。

避難は、燃えている領域を避け、風上に向かい、幅のある道路や川沿いを通って、行政が指定する避難場所や公園などの広い場所に行くのがポイントになる。

夜は、就寝中で気づくのが遅れたり、停電で避難の準備に手間取ったりすることもある。様々な状況を想定し、家族や住民で役割分担を含めて相談しておくことが大切だ。

飛び火による延焼を防ぐには、火の粉が入らないよう窓や戸を閉めるほか、枯れ葉や外壁などをぬらしておく予防散水、屋外の燃えやすいものを片付けて洗濯物を取り込んでおくことが挙げられる。

問題1

本文中の①、②にあてはまる言葉や数字を答えなさい。

①(たばこ) ②(75.2)

問題2

火災から避難する際は、火の性質をふまえてどのように避難するとよいですか。図を参考にして、火の性質も含めて、簡単に説明しなさい。

(例)火は風に乗って広がるので、風上に向かって、できるだけ広い道や川沿いを歩いて避難する。

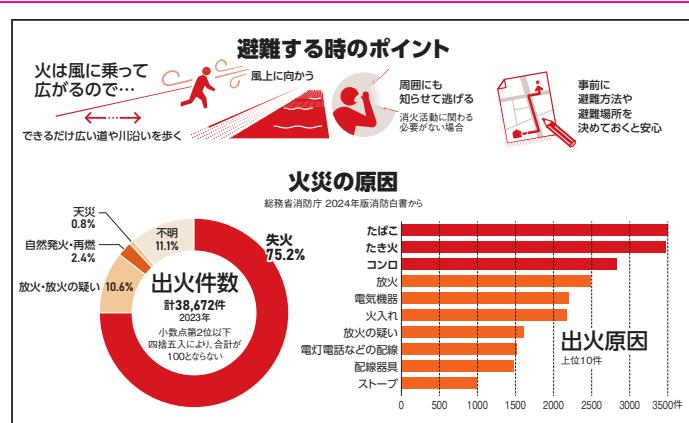
問題3

大分市佐賀関で起きた火災では、飛び火が延焼の一因になりました。飛び火による延焼を防ぐためにしておくとよいことを、簡単に説明しなさい。

(例)火の粉が入らないよう窓や戸を閉め、枯れ葉や外壁などに予防散水し、屋外の燃えやすいものを片付けて洗濯物を取り込んでおくこと。

プラスアルファ

大分市佐賀関の火災に匹敵する規模で市街地が燃えたのが、2024年1月の能登半島地震に伴う石川県輪島市のケースと、16年12月の新潟県糸魚川市のケースだ。輪島市では、店舗や木造住宅が密集していた「輪島朝市」付近が焼けた。消防庁などの調査によると、明確な原因是特定されておらず、揺れで屋内の電気配線が傷ついた可能性がある。これが広がり飛び火も発生した。糸魚川市の火災は強風下で起きた。現場は木造の建物が密集する市街地。当時は強風注意報が発表されていた。1軒から始まった火災による火の粉は、陸から海に向かう風に乗って10カ所以上に飛び火した。木造密集市街地は、東京などの大都市でも課題だ。地震や強風などの条件がそろえば大規模化のおそれがある。



出火の初期の、まだ火が小さな段階で消し止めること。

「火災の原因」の図に注目。①「出火原因」のグラフから、一番多いのは「たばこ」。②「出火件数」のグラフから、失火は「75.2%」。失火は、不注意で火事を出すこと。

「避難する時のポイント」の図に注目。東京大学の広井悠教授は、「初期は消火器などで消せる可能性もあるが、火が背の高さを超えるほどになれば難しくなる。周りの人に知らせて協力を求め、消火に関わらない人は安全な場所に逃げてほしい」と話す。

本文第6段落に注目。飛び火は、強風で火の粉や火種が拡散し、離れた所で着火すること。大分市の火災では、風にあおられた火の粉が、離れた複数の場所で、同時多発的に火災を引き起こしたとみられる。避難した住民は、あちこちに飛び火があり、ピンポン球ほどの火の玉が降ってきたと話す。密集市街地は火災拡大のリスクが高い。耐火性の高い外壁や防火窓を採り入れると燃え移りにくくなる。建物間に防火壁を立てる、空き家を解体して空間を確保するといった対策も、火災に強い街につながる。

朝日新聞 時事ワークシート
図表の読み解き

おそだいきぼ 襲う、大規模火災

※原文から一部書き直している場合があります。

解答・解説

大分市佐賀関で起きた火災^{*}は、180棟以上を巻き込む惨事になつた。火災を防ぐには、まずは火を出さないこと、そして消火器などによる初期消火が重要になる。

火災の原因で一番多いのが、
①の不始末。次いで、たき火やコンロが続く。雷といった天災によるものは1%に満たず、失火が②%を占めている。

広がってしまったら、拡大を防ぎ、巻き込まれないようにすることが大切になる。

避難は、燃えている領域を避け、風上に向かい、幅のある道路や川沿いを通って、行政が指定する避難場所や公園などの広い場所に行くのがポイントになる。

夜は、就寝中で気づくのが遅れたり、停電で避難の準備に手間取ったりすることもある。様々な状況を想定し、家族や住民で役割分担を含めて相談しておくことが大切だ。

飛び火による延焼を防ぐには、火の粉が入らないよう窓や戸を閉めるほか、枯れ葉や外壁などをぬらしておく予防散水、屋外の燃えやすいものを片付けて洗濯物を取り込んでおくことが挙げられる。

問題1

本文中の①、②にあてはまる言葉や数字を答えなさい。

① (たばこ) ② (75.2)

問題2

火災から避難する際は、火の性質をふまえてどのように避難するとよいですか。図を参考にして、火の性質も含めて、簡単に説明しなさい。

(例) 火は風に乗って広がるので、風上に向かって、できるだけ広い道や川沿いを歩いて避難する。

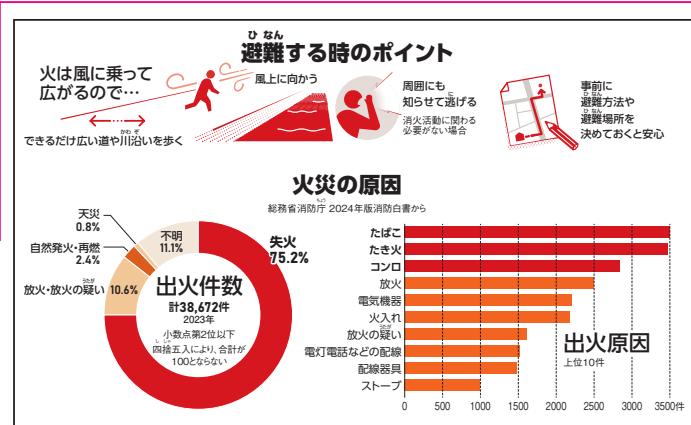
問題3

大分市佐賀関で起きた火災では、飛び火が延焼の一因になりました。飛び火による延焼を防ぐためにしておくとよいことを、簡単に説明しなさい。

(例) 火の粉が入らないよう窓や戸を閉め、枯れ葉や外壁などに予防散水し、屋外の燃えやすいものを片付けて洗濯物を取り込んでおくこと。

プラスアルファ

大分市佐賀関の火災に匹敵する規模で市街地が燃えたのが、2024年1月の能登半島地震に伴う石川県輪島市のケースと、16年12月の新潟県糸魚川市のケースだ。輪島市では、店舗や木造住宅が密集していた「輪島朝市」付近が焼けた。消防庁などの調査によると、明確な原因是特定されておらず、搖れで屋内の電気配線が傷ついた可能性がある。これが広がり飛び火も発生した。糸魚川市の火災は強風下で起きた。現場は木造の建物が密集する市街地。当時は強風注意報が発表されていた。1軒から始まった火災による火の粉は、陸から海に向かう風に乗って10カ所以上に飛び火した。木造密集市街地は、東京などの大都市でも課題だ。地震や強風などの条件がそろえば大規模化のおそれがある。



出火の初期の、まだ火が小さな段階で消し止めること。

「火災の原因」の図に注目。①「出火原因」のグラフから、一番多いのは「たばこ」。②「出火件数」のグラフから、失火は「75.2%」。失火は、不注意で火事を出すこと。

「避難する時のポイント」の図に注目。東京大学の広井悠教授は、「初期は消火器などで消せる可能性もあるが、火が背の高さを超えるほどになれば難しくなる。周りの人に知らせて協力を求め、消火に関わらない人は安全な場所に逃げてほしい」と話す。

本文第6段落に注目。飛び火は、強風で火の粉や火種が拡散し、離れた所で着火すること。大分市の火災では、風にあおられた火の粉が、離れた複数の場所で、同時多発的に火災を引き起こしたとみられる。避難した住民は、あちこちに飛び火があり、ピンポン球ほどの火の玉が降ってきたと話す。密集市街地は火災拡大のリスクが高い。耐火性の高い外壁や防火窓を採り入れると燃え移りにくくなる。建物間に防火壁を立てる、空き家を解体して空間を確保するといった対策も、火災に強い街につながる。